

すべては**6**年前の夏、北海道マラソンに出場したことから私の運命は大きく変わった。

当時の私はマラソン競技に没頭しており、関西圏を中心に全国津々浦々のフルマラソンに出場していた。果ては世界**6**大マラソンのひとつに数えられる、アメリカのシカゴマラソンにも遠征した。

ところで、本番のレースだけでなく、普段の練習においても私は補聴器を着けて走らない。補聴器は水分に弱く、とりわけ汗に含まれる塩分は大敵だからだ。また、補聴器を着けていると風切り音がノイズとして大音量で入り、とても聞けたものではない。周囲の音がノイズにかき消されてしまうため、結果として裸耳の時と変わらないのである。

もっとも補聴器を着けずに外で走るといふ行為には一定のリスクが付きまとう。たとえば、練習中に緊急車両に遭遇した場合。音源の方向を把握できないため、どこから鳴っているのか分からない。そもそも補聴器を外している時は、すぐ後ろでけたたましく鳴るサイレンすら気付けないのだ。でも周囲の人にとって、走っている私の耳が実は聴こえないということは、外見からはまったく判断がつかない。普段、補聴器を着けて生活をしていてもその補聴器が髪に隠れていれば一見して分からないからだ。ましてや走っている最中は健聴者と同じで、耳に何もつけていない。一言二言会話をすれば、話が噛み合わないことがすぐに露呈するので、あ、もしかして聴こえてないのかなと思われるかもしれないが、黙ってさえいれば私が聴覚障害者であるということを見抜くのは不可能だ。

つまり、聴覚障害は外見から非常に判別しづらい障害であると言える。そしてそのことが、この北海道マラソンでひとつの事件を引き起こす。

その日の札幌は**30**度を超えるコンディションだった。私は北海道マラソンまでに真夏のレースを二度経験していたが、主戦場は冬場の大会。経験不足の暑さとの闘いに苦戦する中で、私の意識はひたすら前方に集中していた。キョロキョロと周囲を見わたす余裕がなかったのである。

レースも終盤に差しかかり、周りのランナーもまばらな**33**キロ地点、私は肩に衝撃を受け、すっ転んだ。

何が起こったのか咄嗟に理解することができなかった。

前方にはランナーが二人、後ろはかなり離れて数人のランナー。

まさか、突き飛ばされた？

こんなに道幅があるのに？

どういうことやねん！

激しく動揺したが、私は怒りと痛みで熱くなり、膝からの出血をものともせずゴールまで走り抜いた。

それにしても、なぜこういうことになってしまったのか。帰路の飛行機の中でようやく冷静さを取り戻した私は考えた。

私の後ろにランナーがやってきた時点で、私は全くその気配に気付いていなかった。後ろのランナーはもしかしたら私を追い抜く時に後ろから私に声をかけたのかもしれない。

私は私で、必ずしも真っ直ぐ走っていたという自信はない。記憶も定かではない。

さらにレース中なので私は補聴器を着けておらず、たとえ声をかけられたとしても、私にはその声が届いていない。もしかしたら悪意なく進路を塞いでしまっていたのかもしれない。

いや、結果として伴走者は私を突き飛ばして追い抜いたわけで、私の進路取りに問題があった可能性は高い。

だとしたら私にも非はあるのではないか…。

そういえば今まで出場したマラソン大会で、視覚障害者ランナーは「視覚障害」と書かれたビブスを着用して走っていた。あれと同じように、聴覚障害者ランナーにも「聴覚障害」と書かれたビブスがあれば……。

「視覚障害」と書かれたビブスはよく見かけるが、「聴覚障害」と書かれたビブスを着用しているランナーは見たことがない。おそらく、耳が聴こえないだけで目は見えているのだから、レース中に配慮することもそれほどないと思われているのかもしれない。

ひょっとしたら「聴覚障害」と書かれたビブスそのものが存在しないのかもしれない。でも、なかったら自分で作ったらええんや！

私は製作にとりかかった。黄緑色のビブスの胸部と背部両方に「聴覚障害」とプリントし、背部には「聴覚障害」の他に、「後ろから声かけられても聞こえません。ゴメンね！皆頑張ろう！」というちょっとしたメッセージも添えた。

試行錯誤の末、翌**2015**年の大阪マラソンで念願のビブスデビューを果たした。以来、現在まで**11**のフルマラソン大会で着用している。だが、これがゴールではない。

ビブスを着用するのは自分と周囲のランナー相互の危険回避のためではあるが、着用して走る私の様子を沿道の観客だって見ている。もしかしたら、同じ境遇の聴覚障害者が見ていて、同じようなビブスを着用して走りたいと思う人が現れるかもしれない。思い上がりかもしれないが、そういった人々の背中を後押しするきっかけになることができれば。

そのような思いで挑み、ビブスを着用して出場したこれまでのレースでは、身振り手振りでエールを送ってくださる沿道の観客や給水ポイントのボランティアの方、中には追い抜きざまにわざわざ振り返り、手話で「頑張れ」と伝えてくださるランナーもいた。走りながら後ろを振り返るといのはかなりの労力を要するというのに。それでも伝えようとしてくださるお心遣いに胸が熱くなった。

決してこのやり方が正解だとは言えないかもしれない。けれど今の自分にできること、探しだした答えに対し、多くの方から反響と賛同をいただけたことに只々感謝しかない。

「目が見えないことは人と物を切り離す。耳が聞こえないことは人と人を切り離す」と

は、ドイツの哲学者カントの名言である。だが、私は聴覚障害ランナービブスを開発したことで、切り離された自分と周囲の人とを輪にすることができた。その輪を和にするべく、私の挑戦はこれからも続く。